多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2011 年　6　月　12 日

派遣者氏名（専門分野）	■■■■■　　（　フランス文学　）

下記のとおり報告します。
記

研究テーマ	ジョルジュ・ベルナノスの小説作品における青年像を分析するための 20 世紀初頭の社会学的（おもに教育上の定義）並びに心理学的見地から見た青年期・思春期についての調査

派遣期間

2011 年 2　月 10　日　　～　　2011　年　4 月　10 日

訪問研究機関	国	都市	訪問機関	受入研究者
	フランス	パリ	フランス国立図書館	

派遣先で実施した研究内容

20 世紀前半にカトリック作家としてジョルジュ・ベルナノスは文壇に登場した。1926 年に上梓した処女小説『悪魔の陽の下で』から遺稿となる『カルメル会修道女の対話』に至るまで、主要な人物が司祭であるがゆえに、キリスト教精神を中心にした分析が多くなされてきた。また政治評論も多く執筆し、当時台頭していた共和派に対して右派（王党派）の立場から多くの提言をしている。このようにキリスト教精神論と当時の歴史的観点からベルナノスの作品を論ずることは多いが、社会学的な視点はあまり注目されてこなかった。そこで注目したのは、小説の登場人物として多くみられる青年たちである。

キリスト教において、子供はもっとも神に愛されている者であると考えられている。当然のことながらベルナノスも Esprit d’enfance「子供の精神」の重要性を強調している。にもかかわらず、実際に子供が登場するのではなく、13 歳から 20 歳前半の青年が多い。青年への関心は、1913 年 11 月 2 日に、ベルナノスが当時所属していたアクション・フランセーズの機関紙である Avant-garde de Normandie「アヴァン　ギャルド・ドゥ・ノルマンディー紙」に、La Jeunesse

française autour de Maurras「モーラスを囲むフランスの若者たち」を寄稿していることからもうかがわれる。また第一次世界大戦後の若者世代に関心を持ち、二人の青年を主人公にした『悪夢』を執筆中の 1931 年に「戦後の若者」についての調査をフィガロ紙に依頼し、同年 11 月 13 日、同紙に現代の若者像についての記事 Sous les yeux d'une génération sacrifiée「犠牲となった世代の目前で」を発表している。ベルナノス作品の青年像を分析することによって、これまでにあまり行われなかった社会学的な視点から分析をすることができるのではないかと考えた。

19 世紀に高まりを見せた教会批判により、フランスの教育は 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて大変革をとげ、教会・修道会主導から国の管轄下へと移行する。共和国の精神に基づく教育の新しい概要を作成するために、当時公教育省大臣であったジュール・フェリーは 1880 年から施行されるさまざまな教育法（通称フェリー法）作成のため、哲学者で自由思想主義者フェルナン・ビュイソンに指揮をとるよう要請する。ビュイソンは 1877 年に出版された『教育辞典』の編集責任者で、1911 年に改定された辞典の序文では、1880 年以降のフェリー法で決定された事柄を述べ、これまでの修道会による教育を脱却し、教育者にとって、共和国精神に則った新たな教育によって社会に役立つ人間養成するための道しるべとして同辞典を作成したと述べている。1877 年から 1891 年までに編纂された版では、「児童期 enfance」の説明のなかに、青年 adolescent という語彙がもちいられ、現在のように児童期と思春期をまだわけていないことがうかがわれる。同様に「青年期 : adolescent/adolescence」と「思春期 : puberté」「若さ jeunesse」の項目は記されていない。1911 年版では、「青年・青年期：adolescent/adolescence」の項目は存在するが解説はなく、「大人: adultes」「職業訓練: apprentissage」「初等教育の補足 complémentaire (cours)」「初等教育後 post-scolaire」の参照となっている。青年・青年期：adolescent/adolescence という言葉は「職業訓練: apprentissage」で一回、「初等教育後 post-scolaire」では数回使われているものの「大人: adultes」「初等教育の補足 complémentaire (cours)」では一度も言及されない。当時の傾向として、小学校教育を終え仕事を始める 13 歳以降ではすでに大人扱いをされていた。

さきに挙げた「大人: adultes」「職業訓練: apprentissage」「初等教育の補足 complémentaire (cours)」の３つの項目は主に、12 歳から 13 歳で小学校課程を終えて社会で働く人々の教育、卒業後の活動とその歴史について述べられている。18 世紀に Philipon de la Madeleine が、教会での神父による説教以外に教区民のために農業や工業に関する説明会の必要性を唱えてから、19 世紀にわたって行われた修道会による技術習得のための夜間授業、世俗勢力による同様の教育の失敗

と、19 世紀後半から 20 世紀前半にかけて国の支援（管轄は県）による本格的な初等教育以後の高等教育設立までの歴史を解説している。第二の「職業訓練: apprentissage」では 1863 年の調査から 1902 年まで幾度か行われた農業工業相による調査委員会と労働高等顧問常任委員会の調査によって、若者の労働環境悪化と技術力低下が指摘される。大規模工業による機械化が進み、以前のように青年に技術を伝える徒弟制度が消えつつあり、若者がより専門的な技術を学ぶ機会が奪われ、よって安い給与しか与えられないという労働環境の悪さが問題となる。また簡単な機械操作技術で、すぐにその日の糧を得られる労働環境によって若者とその家族がその状況に甘んじている点も指摘している。この結果から、すぐに役に立つ労働技術のみならず、一人ひとりが状況を判断し、予期せぬ時代においても現実に立ち向かっていける能力を養うべきであると調査委員会は報告している。

初等教育を終えた人々への教育の当初の目的は、技術者育成のみであったものが、時を経るごとに社会人としての人格育成へと変化していく。この新たな高等教育が国の管轄下になって以降、教育指導要綱が定まっていく。優先課題であった識字率の引き上げのために選ばれるフランス文学作品も、キリスト教的な要素を排除した共和国精神にのっとった作品に限定される。授業では多く映像（映画）が使用され、科学実験などのデモンストレーションのみならず、地理や旅行記、海外の政治状況を伝えるジャーナリズム的要素を含むようになる。また教育の対象となる年齢も、小学校教育以降と範囲を限られていなかったものが 13 歳ごろから 20 歳までと限定されていく。それを明らかにしているのが 1894 年に発表された当時の公教育相大臣であったポアンカレの演説である。演説によれば、フランス国中に小学校以降でも教育を受けられる機関を設けること、そこでは誰でも教育を受けられるがとくに 12 歳から 18 歳の青年を対象としていることが述べられている。またはこの教育機関を la maison de jeunesse 若者の家、つまり若者の心の拠り所となると同時に世代を超えた交流の場となることをポアンカレは演説のなかで示唆している。

またポアンカレは、共和国の精神が最初に法律によって枠組みが出来上がり、つぎに教育によって広まり、よき共和国国民が育つようにと勧めている。その傾向を明らかにしているのが「初等教育後 post-scolaire」である。青年期をともに過ごすのみならず、そのあとにも所属し続ける学生互助会制度が設けられる。会員には学校を維持するために毎年 10 サンティームの会費を支払う。さらに図書館の設立や映画館、無料診療所などが設けられ、会員によるパーティーなどの催しものも行われるようになる。娯楽面のみならず、親のない子の世話をするなど慈善事業にも関わっている。このような会員組織は、大都市単位と県単位で存在し、1906 年の段階で 300 の組織が存在し、1910 年では 80000 人とその勢力を伸ばしている。このような社会活動

は政治にも影響を与える。一つの例をとしてノルマンディーの地方議会では学生互助会連盟が存在し、民主主義思想をもつ若者の支持を集めている。

子供時代以降の大人への教育は、教会で行われる説教以外に、教区民の状況にあった知識を伝える機会として当初設けられた。その考えは時代の変化とともに、教育の時期が 12、13 歳から 18 歳へと限定され、その内容も技術的な面にはとどまらず人格育成、とくに共和国精神の育成へと目的を変えていく。このように状況の移り変わりとともに、人間の一時期として「青年期」が現れる。よってこの時期は、これまでの歴史のなかでは子供あるいは大人として認められていたあいまいな時期を、社会・政治状況によって分離した「人間の新たな一世代」と言えるだろう。

上記にあるように小学校教育の拡大・充実ののちにその後の教育システムが出来上がる。国による教育は、これまで行われていた教会・修道会が行う宗教による教育とは違い、当時台頭し始めていた心理学に基づく。1905 年に心理学者アルフレッド・ビネとテオドール・シモンらによって子供の知能テストが行われ、「学習習熟度の遅れている子　enfants arriérés」対策を取ろうとしていた。この二人だけでなく、ベルギー人オヴィッド・デクロリーは学校の教育についていけない子供ばかりを集め、有効な学習指導とは何かを研究している。この流れが小学校以降の教育に取り入れられるのは当然の流れであろう。今回、研究資料として調査したピエール・メンドゥースは、1909 年に出版される Ame de l’adolescent の結論で、青年時代の特徴に応じた教育の必要性を説いている。それでは、メンドゥースはどのように青年時代を分析したのであろうか。

序論のなかで強調されているのは、青年期 adolescence の言葉の定義がなされていないという点である。19 世紀に編纂された辞書 Littré では、青年期は子供時代の同義語とされ、心理学者によってもその概念はあいまいで、ひいては教育分野でもまだ青年期を区別していないと述べている。

13 歳ごろになるとこれまでの安定が崩れることによって子供時代を終え、第二の誕生とみなされる「思春期」が始まる。この時期の行動は、観察者のみならず当の本人にもその理由がわからないという。作者はこの問題の時期を、身体の統計結果や調査結果から得た医学的知識と、特にアメリカの精神医学研究をもとにした資料、実際にこの年代の学生の日記やインタビューによって明らかになった社会学的調査結果、文学先品などにみられる若い主人公の葛藤分析から多面的に、またフランスだけにとどまらずアメリカ、ドイツ、ベルギー、ハンガリーなど海外の実情も取り上げながら、青年時代の特徴を分析している。

メンドゥースの述べる若者の特徴－身体・精神・教育―

医学的な見地からは、まず体の成長に焦点を当てている。身長、体重や、脳、肺、筋肉、骨、膀胱、喉、すい臓、脾臓などの発達について、多岐にわたる統計データを挙げているが、肉体的成長による青年期の時期の識別は難しいとしている。多くの器官は青年時代に絶頂期を迎える。同様に頭蓋骨の発達は青年期に著しいが、脳の重さと大きさはそれに比例しない。7 歳から 8 歳ごろに脳は次第に重くなり、12 歳から 13 歳で最大となる。ただ 20 歳から 30 歳にかけても成長することがある。よって身体的成長を軸にして考えた時に言える青年期は、13 歳から 27 歳ごろまでと幅が広くなる。血管についても同様で、先に肺血管が大動脈より成長する。このように体の各器官によって成長時期が様々である故に、身体的側面から青年期を限定することは難しいとみなしつつ、またこの不安定な状態が続くゆえに精神的バランスがとりにくいと結論付けている。

第二次性徴については、具体的な現象を挙げるとともに、若者が感じる不安、性的なことがゆがめられて教えられている現実に警鐘を鳴らしている。とくに社会状況の変化によって、映画やポスター、イラスト入りの雑誌などから情報が入り早熟傾向にあること、特に女子教育に関してはこれまでの修道会による教えがこの点に触れることを避けた故にヒステリーなどの症状が出ていることを挙げている。男女ともに情報が偏ったり、足りなかったりする場合があるので、生物学の知識を用いて、確かな情報を学校教育によってあたえる必要性を強調している。

もうひとつの特徴は思春期に見られる多くの精神疾患である。疲れを感じる神経組織無勢力、消化不良、不眠、ヒステリー、破爪病、緊張病（カタトニー）早期痴呆症などがあるが、それらの原因は単に身体的成長、特に第二次性徴による体の変化によるものが大きな原因と考えるが、精神の変化も大きいと認識している。精神の変化について具体的な原因は述べておらず、この側面では特に社会学的な見地（アンケートや若者の日記、作者自身が治療した患者の症例など）から実際の例を挙げて分析を行っている。

病的な側面は持たないまでも、青年期の精神状態の特徴をとらえるために「愛」「夢」「弁証法」（特に感情表現について）「勇気」についてから考察をしている。「愛」の章では、同性愛的傾向については、一時的なもので正しく指導すれば問題はない。異性に対する恋愛感情の特徴はプラトニックで、時に年上に憧れることが多い。このときの感情は愛というよりも「守られたい」「教えてもらいたい」という受け身の愛情である。また友達同士で「群れる」ことを好む傾向がみられる。子供も同じように群れるが、近くに住んでいるなど特に人を選んでいるのではない。青年の場合は同じ目的を持ち、仲間意識が生れて団体行動をしやすくなる。このように 13 歳くらいから、子供時代の利己的な愛情ではなく利他的な愛情が生まれるという。

同書の特徴として、若者の感情を分析する際にどのように対処すればよいのかアドバイスをしていることがあげられる。たとえば同項目では、教員は青年に対して愛情表現をすること、威厳を示すことを強調しているし、同様に「夢」の項目でも、青年が自然現象に自分の感情を反映させる特徴を踏まえて、芸術教育の具体的方針を提案している。

Leur goût est rarement bon, faute de discernement et de choix. Aussi y a-t-il intérêt à augmenter avant la puberté et à diminuer ensuite le nombre d'heures consacré à l'étude du dessin et de la musique, et cela que les élèves montrent ou non des dispositions ; car dans le premier cas ils auront tout à gagner d'une culture générale et rien à perdre puisque les aptitudes apparaissent de bonne heure, dans le seconde, il serait déraisonnable de préparer à une carrière artistique des sujets non doués. (Pierre MENDOUSSE, *L'Ame de l'adolescent*, 1909, p. 101-102)

（訳）青年たちの趣味が良いことはまれで、それは物事の区別がまだつかず、選択の仕方がわからないからである。そこで思春期のまえにデッサンや音楽の練習時間を増やし思春期にその時間を減らせば良いのではないか。これは対応策ではなく、生徒自身が示していることである。というのも、思春期前に一般的文化教養を得る、それは時間の無駄などではない。そのあとになると才能は開花するのだから。才能がない芸術に対して準備するなどばかげたことである。

また感情や行動を分析した後に、その意味やこれから大人になってからの影響を述べるという特徴も見られる。青年の「曖昧さ」を好む傾向を「夢」の欄で挙げているが、そのメランコリックな性質は大人になって以下の形で現れるという。

Tandis que la plupart des futurs hommes pratiques ne font que traverser ce genre de mentalité, les presonnatilités plus complètes le combineront avec une réflexion toujours mieux informée ; par contre, ceux en qui il persistera sans ce complément, iront augmenter le nombre des inventeurs chimériques, des ratés de l'art ou de la littérature qui, vibrant à toute impression esthétique, sont incapables à donner à leur émotion un corps viable ; des joueurs aux martingales infaillibles, des commerçants et industriels, qui, de faillite en faillite, en un mot de tous ceux qui sont impuissants à adapter leur rêve aux conditions de la réalité. (p.128)

（訳）多くの社会で活躍する大人がこのような気質（精神の不安定さを指す）を一時的なものとして経験し、完全な人格を持つ者はその気質にさらに思考を深めて取り入れる。逆に青年時代特有の気質を思考などで補わなかった者は、妄想をふくらませ、芸術家あるいは作家として成功せず、自分の美的感覚を震わせ続け、自分の情緒を具体的な形をして表現する能力を欠く。疲れを知らないギャンブラー、失敗ばかりする商人か実業家、一言でいえば自分の夢を

現実に合わせることができない人たちなのである。

身体・精神的な問題を解決するために教育上の注意点と、これから起こるかもしれない問題点への対処法として多く挙げられているのが体育教育や文化活動である。自転車のようなリズム感のあるスポーツは良い体のリズムを作り出すのに役立つと明白な指示が出されている。

Le cyclisme en particulier, très goûté par la plupart des néo-adolescents, agit de la manière la plus bienfaisante sur leur corps et leur esprit. Non seulement la quntité d'air consommé(Pour une vitesse de 10 à 12 kilomètres, 5 fois plus qu'à l'état de repos, la variété des muscules utilisés, l'allure rythmique du mouvement accélèrent la nutrituion, régularisent les fonctions, guérissent parfois les troubles locaux, mais plus efficace encore est le plaisir résultant à la fois de la vitesse obtenue par un faible effort et des représentations fugaces sans cesse renouvelées, deux au rétablissement constant d'un équilibre instable et à la diversité des paysages qui se succèdent. (p. 284)

（訳）

サイクリングはとくに思春期に入ったばかりの若者の好むところで、彼らの肉体と精神にいい影響を与える。肺活量が通常の五倍になるだけでなく、あらゆる筋肉を使い、筋肉をリズミカルに使うことによって食欲も増進され、体の機能が整い、いろいろな所に現れる問題も解決する。しかしさらに良いのは少しの力でかなりの速さを実感できることと、一瞬一瞬の変化の感覚から喜びを得られることである。その二つが不安定な感覚を絶えず修正し、移り変わる景色の多様性を得られる。

作者は結論として、これまで小学校教育を終えた 13 歳から 18 歳くらいの人々は、これまで世間一般でみなされていた子供でもなければ大人でもない、ひとつの特徴を持つ時期であると認識されると述べる。そして彼らはあらゆる面で不安定であることを、医学面、精神面、社会面から結論付けている。ゆえに将来、どのような大人になるのかが未知数である。そこでメンドゥースはこの時期の青年に対する教育の意義をこのように述べている。

Du moment que l'adolescent, à la différence de l'adulte et même de l'enfant, est avant tout une spontanéité vivante, du moment que dans la genèse de la personne humaine il y a une période pendant laquelle les médiocres peuvent s'élever au-dessus d'eux-mêmes et les meilleurs au-dessus de leurs

contemporains, on voit combien est nécessaire à cet âge une éducation capable de fixer en les sélectionnant les variations qui ne manquent presque jamais à se produire. (p.299)

（訳）

青年期は、大人と子供の時代とは違い、生き生きとした自然さみられる時期である。その際に人格が生まれ、能力の劣ったものが自分の実力以上のレベルに達したり、優秀なものがほかのものよりも劣ったりする時期である。そこでどれだけ教育が、必ず現れる様々な変化を選別しながら固定化していく必要性があるかがわかるだろう。

これまでの修道会による宗教教育から脱却し、また１９世紀の間支配していたルソーの唱えた子供の本来持っている力を信じ、大人からの介入を避ける教育ではなく、大人つまり科学に基づいた教育を施すことによって真に人間が出来上がると作者は解説している。

「思春期」という時代は、工業面の発達によって高い技術が必要になり、それを習得するために修学期間が延長されることによって生まれた時期であるといえるようである。小学校教育以後の学校システムが設立された当時は、技術面の習得のみに焦点が当たっていたが、その後、政治の変化、特に政教分離の流れとともにこれからの時代を担う共和派市民の育成機関へと変わってきた。特に身体的・精神的不安定さは、彼らに新しい思想を与えるのに最適の土壌であるようにみなされている。

裏面に続く

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

20 世紀当初の青年像を探るために、今回は 1911 年に出版された『教育学事典』と同時代の精神科医ピエール・メンドゥースによって書かれた Ame de l'adolescent と Ame de l'adolescente を調査した。

20 世紀初頭の教育は小学校教育で終了していたが、高等教育へ発展し修学時間が 3 年延長される。その萌芽期に編集された教育辞典では、当時の青年の問題が手工業から機械による大量生産へと移行する当時の社会・経済状況と大きくかかわりあっていることが明らかになった。脱キリスト教化は国の政治や、地方公共団体のシステムの変化のみならず、教育界にもキリスト教精神を排除し共和国民養成を目的へと転換させる結果となった。また当時教育改革に取り

入れられた精神医学によって、青年の身体的・精神的欠陥に目を向けられるようになり、青年対策のマニュアルができつつあった。

研究対象としているベルナノスは、大人と子供はその精神構造から峻別しているが（特に大人は欺瞞によって、子供は反抗で特徴づけられる）、子供と青年の区別を明確にしていない。今では当然のものとして分けられている子供時代と青年時代をなぜ同じにするのかは、当時まだ青年期というものが確立していなかったという理由がつけられる。また、子供と青年を同じにしつつも、この時代に未来を担う青年教育が起こり、国の政治が大きく変動している背景から、ベルナノス自身がしばしば小さな子どもたちではなく、戦争へ駆り出されていく世代へ向けて言葉を発したり、多くの若者が大人の犠牲になっていることを憂えたり、また自身の青年期を振り返っているのも、ベルナノスの関心がキリスト教的な子供という概念的なものではなく社会における子供（青年も含む）であることがうかがわれる。エッセー『虐げられた子供たち』の中で、ヒットラーのことを「怪物のような子供」と形容し、彼の青年時代に受けた教育や大人からの扱いによって「怪物」となってしまったと述べている。このようにヒットラーのような独裁者や多くの政治家、聖職者の欺瞞の根源を子供時代にさかのぼって考察している点からも、20 世紀前半の諸問題の根源を明らかにする手段として青年期に着目していると考えられる。

派遣後の研究発表の予定

大阪大学フランス文学会　『ガリア』51 号　論文執筆
日本フランス語フランス文学会　秋季大会　口頭発表　2011 年 10 月 9 日（土）